

保健体育科 Health & Physical Education

今年度保健体育科では、教科ならではの文化を「自分(たち)のよりよい動きや生活について課題を見つけ、その解決にむけて、改善点や方法を考え、動きを試行したり、自分の生活に取り入れようとしたりすることを繰り返すこと」ととらえ、授業実践を重ねました。

研究協議会では、「器械運動 マット運動 一動きの感じを伝え合い、コツをつかみ、動感を充実させよう」を実践しました。その動きをしようとするときにどこに意識があるか、どこに力が入っているかを感じることを「動感」ととらえ、それを伝え合うことで動感を充実させながら技が体現できるようにしていくことをねらいました。

子どもたちが動感を意識しやすいように、運動遊びから動感を伝え合うことを始め、選択した技が体現できるように同じ技群の仲間と動感を伝え合う活動を設定しました。子どもたちは、ワークシートに自分の動感や仲間から得た動感を書き込んだり、視聴覚機器を用いて互いの技を撮り合ったりしながら、「雄大・優美・安全」な技を目指して取り組んでいました。

協議会後は、自己やチームの成果や課題を全体で共有することで、子どもたちが新たな視点をもてるように授業実践を行っています。今後も、それぞれの題材で子どもたちがどのような対話をするかが教科ならではの文化を味わっていることにつながるのかを考えながら授業を構築していきます。(杉山慎一郎)



家庭科 Home Economics

本年度、技術・家庭科では「よりよい生活を営む人」を育みたいと願って授業実践を重ねました。研究協議会では、動画から、幼児ができること、幼児にとって難しいことを探り、グループで幼児の実態を整理していく子どもたちの姿を主に見ていただきました。「箸を使うことができる」「ものを作るようすが職人のようだ」「今できないことも、できるようになる途中だ」などの発言があり、幼児の発達の特徴をとらえ直す機会となりました。その後は、発達の特徴をもとに活動計画を立て、幼児との触れ合い体験に臨みました。目の前の幼児の気持ちや、遊びの進み具合などによって、活動内容を変更しながらかわることで、幼児のできることの多さ、かわる楽しさや難しさを実感し、幼児のために中学生としてできることや今後のかかわり方について改めて考えることができました。

今後も、様々な視点や立場から生活を見直したり、考えた解決策を検証したりする機会を設定し、子どもたちがよりよい生活を追求・実践することができるような授業づくりに取り組んでいきたいと思ひます。(堀池美衣)



技術科 Industrial Arts

技術科では「よりよい生活を営む人」を育みたい人間像に設定し、授業で「もの(製作物や生物)に対する思いや考えを凝縮する姿」が見られるように実践を重ねてきました。そのための手だてとして、「試作する活動を題材構想に盛り込むこと」と「異なる考えをもつ他者と意見を伝え合ったり、批判し合ったりすること」を今年度の重点に設定しました。

本年度の研究協議会では、生物を育成する場面で欠かすことができない灌水を自動で行う活動を多くの先生に参観していただきました。子どもたちは市販のセンサを用いずに自分たちの手でセンサを創り出す活動を通して、イノベーションする難しさを感じながらも仲間とかかわりながらプログラムを制作していききました。実際に動作した時の喜びや、センサの感度を探りながら新たな機能を生み出す達成感を味わうことができました。授業後の協議会では、実践した授業の内容や制御基板についての話題ばかりでなく、参観された先生方の計測・制御の授業実践を知ることができ、たいへん有意義な時間となりました。

今年度の授業実践から、子どもたちが課題に対してどのように思考し、問題を解決しようとするのかについて、授業者がより具体的にイメージすることで、技術科ならではの学び合いや対話をより深めることができるという思いを強めました。今後も、有効な手だてを追求し、子どもたちの姿と照らし合わせながら「よりよい生活を営む人」を育むことができるよう、授業実践を重ねていきたいと思ひます。(本部康司)



英語科 English

“I enjoyed talking with friends. Her question is really good! (2年生)” “I think we should enjoy playing sports together to communicate with people who speak another language. It doesn't matter what language they speak. We can be friends! (3年生)” 英語科では、子ども同士が、英語でのやりとりを通して幅広い表現にふれながら、主体的に思いや考えを伝え合い、「伝わった実感」を味わうことができる授業を積み重ねました。その際、子どもたちが言語的(英語運用力)にも情意的(意欲や姿勢)にも豊かなコミュニケーションについて考えていくことができる題材づくりを目指しました。

2年生では、子どもたちが書いた「学校に清掃は必要か」のような英文記事をもとに、グループの中で記事の内容について英語で議論し、「よりよい対話とは何か」を考えることになりました。3年生では「来日する外国人は日本語を話すべきか」という話題をきっかけに、異文化・異言語をもつ人々とのようにかかわっていくべきか、英語で議論をしながら互いの思いや考えを理解しました。学年にかかわらず、仲間に伝わる表現に言い換えたり、互いの思いや考えを押し量ろうと聞き返したりしながら、主体的に対話や議論を続けようとする子どもたちの姿が見られました。

子どもたちが主体的な英語でのやりとりの中で、「話す内容」や「話し方や豊かな英語表現」にさらにこだわりながら主体的に学ぼうとする授業実践に、今後も取り組んでいきたいと思ひます。(稲葉英彦・長田敬司・高田幸秀)



2018.冬 No.79
静岡大学教育学部附属静岡中学校

「主体的」を考える

研修部長 高田 幸秀



“Ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country.”

アメリカ合衆国 35 代大統領ジョン・F・ケネディが、就任演説の中で発した有名な言葉です。アメリカという国の内外で、諸々の問題が起こっている中、政府は国民のために何をしてくれるのかと期待を背負って登場したケネディ大統領の「あなたがた国民が、国のために何ができるのか」を問うたこの言葉は、時代背景を考えても当時の国民にとって衝撃的なものだったと考えられます。

このような、50 年以上も前の発言に、今私たちを取り巻く社会を重ね合わせてみます。学習指導要領の施行前から「アクティブ・ラーニング」「主体的」などの用語が頻繁に聞かれるようになりました。学校の中の授業や行事・生徒会活動などの教育の分野に限らず、これからの社会で、子どもも大人も主体性をもってさまざまなものと

対峙していくことが求められます。「何をしてくれるのか」ではなく、「自分にできることは何か」を自問できる人間を育てていくことが大切であり、私たち自身もそのような人間をみざす必要があるのでしょうか。

本年度は、一題材や一授業の子どもの学びの変容を見とり、その際の授業者の手だてや活動の有効性を探りながら授業改善へとつなげていきました。10月12日(木)の教育研究協議会では、430名を超える多くの方々に本校の授業を参観していただきました。その際の視点は、授業者が授業構想の中で「願う子どもの学びの変容」を考え、それが授業の中で、あるいは授業後に見られたかどうか、また「教科ならではの学び合い」とはどのような姿であるのかというものです。事後の教科別協議では、活発な意見交換の中で、参観者の方々と共に、授業観を議論し合えたことを大変うれしく思っています。

来年度、本研究「共に創りあげる授業」は5年目を迎えます。本研究テーマの終わりを意識しながら、「共に創りあげる授業」がいかなるものであるのか、それまでの実践をふまえて示し、各教科で主張できることを具体的な子どものあらわれで教育研究発表会で提案していきたいと考えております。また、そのための具体的な手だてや授業者の願う子どもの変容を示していきたいと思ひます。そして、その成果を多くの方々と共有し、よりよい教育の在り方について考えていきたいと思ひます。これからも多くの方からご指導を頂きながら、日々の研さんに努めてまいります。今後とも、よろしくお願いいたします。

■期日 平成30年10月12日(金) '18 教育研究協議会のお知らせ
■会場 静岡大学教育学部附属静岡中学校
〒420-0856 静岡市葵区駿府町1番86号 TEL (054)255-0137 FAX (054)252-7335
ホームページアドレス <http://www.shizuoka.ed.shizuoka.ac.jp/>
※期日などは予定です。詳細は5月にご案内いたします。

全体研修授業報告〈美術科〉

授業者 土肥 正 通



日時 平成 29 年 11 月 15 日(水)

題材 「問題点を発見することから生み出すプロダクトデザイン」(第 2 学年)

今年度は、「授業者が子どもたちに願う変容」を視点の一つとして授業研究を進めています。11 月の全体研修では、その「願う変容」が生み出される要因として考えられる「教科ならではの学び合い」(対話)を探るために、美術科の授業における子どもたちの具体的なあらわれを見とりました。

授業者は、子どもたちが「美術科ならではの学び合い」(対話)を通して、デザインの機能や工夫などに対する考えを深めていくことができる授業を構想しました。子どもたちが身近な製品(プロダクトデザイン)を使う際の動作の中から問題点を見つけたり、その問題点を解決するための新しいデザインを考えていたりする題材構想には、アーチローラーのような実際の製品から発明者の意図を感じとったり、机やイスを使う動作の中から「荷物を横にかける時に隣の人につぶかる」「清掃の際に運ぶときに不安定で運びにくい」というような問題点を考えたりする授業者の手だてが盛り込まれました。

研究授業では、グループで考えた課題を解決するために、主体的に話し合う子どもたちの姿が見られました。あるグループでは、机の「運びやすさ」を課題と考え、「机をたためるようにしてはどうか」という意見に対し、「ローラーを付ければ運びやすい」という考えが共有された後、さらにローラーを付けた机としての美しさや機能性(機能美)にも話題が及び、改善を重ねた最善・最良の製品が、今、身の回りにある製品であることに気がつく子どもたちの姿がありました。

事後研修の中では、「質的分析(個別観察)」と「量的分析(質問紙)」それぞれの考察をふまえ、授業分析を進めました。分析を進めるうちに、本題材における「美術科ならではの学び合い」(対話)として、課題解決に向けたデザインについて議論を重ねたり、さらに生まれる問題を解決していくために、机やイスの美しさ・機能性について互いの考えを伝え合ったりしながら、デザインについて考えを深めていく子どもたちの姿が見いだされました。また、授業でのそのような子どもたちの営みが、見方や考え方を広げ、美術科の授業で感性を育むことにつながるのではないかと、話されました。今後も、各教科において実践を重ね、さらに研究を進めていきます。(稲葉英彦)



交流研修報告

昨年度に引き続き、静岡市立清水第七中学校との交流研修を行いました。本年度は、道徳の公開授業を含めた三回の校内研修に参加させていただくとともに、本校の全体授業研究にも足を運んでいただきました。清水第七中学校の校内研修では、各教科の授業で、グループの仲間や相談しやすい相手との話し合いを通して、考え方の違いや求め方の誤りなどに気づき、学んでいく子どもたちの姿が印象的でした。道徳については、教科にかかわらずどの職員も同じ立場で話すことができ、充実した研修になると感じました。また、教科のつながりから市内の先生方と交流させていただいた教科もあります。このような取り組みを通して「とても刺激になった」「普段なかなか相談して取り組むことができないので、授業方法や教材について考え、語ることで有益だった」「子どもたちの対話のイメージができた」などの声をいただきました。子どもを惹きつける課題の設定、対話を生むための授業者の手だてなどについて意見交換ができたことは、本校の研究を進めるうえでも大変有意義でした。

校内研修の進め方に悩んでいる、新学習指導要領に対応した授業構想を考えたい、魅力的な題材を開発したい、若い先生を応援したいなど、研修によせるニーズは学校によっても先生一人一人によっても異なっていると思います。研修のもち方や回数、時期、教科など、先生方のニーズを考慮しながら、来年度も一緒に授業について考えていきたいと思っています。興味をおもちの学校は、お電話などでお気軽にお問い合わせください。(堀池美衣)

国 語 科

Japanese

話題の「主体的・対話的で深い学び」を具現化した授業をLIVEで観たいという方は是非、本校研究協議会の国語の授業をご覧くださいたく存じます。

私たちは、子どもたちが言葉や文章などの題材を介して対話し、思考力や資質を育む(国語科ならではの文化を味わう)経験を通して、よりよい人間関係を構築できる人間に成長してほしいと願い、実践を重ねています。今年度は題材化という視点から「対話の充実」に重点を置き、提案をさせていただきました。

授業後の協議会では「対話スキル」や「公開授業の一時間では見られない題材構想」等が話題となりました。そして、意図を持った小集団学習の重要性が確認されるとともに、小集団での対話をどのように全体の対話に生かしていくかが課題として挙げられました。また、白水先生の講演においても、「より国語科らしい対話とはどのようなディスコース(対話)か」という視点をいただくなど、今後の研究を考えるうえでの大きなご示唆をいただくこととなりました。

国語科ならではの文化を味わう授業において「対話」は欠かせません。しかし、どのような対話が行われていれば「より国語科らしい対話(対話の充実)」と言えるのか。その課題を今まで継続して研究してきた「題材選定」や「問い」をふまえながら研究していきます。こうご期待！です。(梶山哲耶・鈴木康弘・木下聡美)



社 会 科

Social Studies

「変化の中にあるEU-統合拡大の光と影、そして、これからの姿」では、「EU拡大によって、どのような変化が起きたのだろう」という問いをもとに、人の移動・農業・工業という三つの視点からEU拡大の変化を調査しました。子どもたちは、「人材交流の活性化と移民・難民問題」「共通農業政策とEU財政の圧迫」「工業発展と失業者の問題」等、各分野のよさと問題点を見いだしました。授業者は、さらに考えを深めることをねらい、「統合拡大は、人々を豊かにしたのだろうか」と問いかけました。このような価値判断を迫る問いにより、子どもたちは立場や価値観によってとらえ方や考え方が異なることに気づいていきました。

「15歳が考える一票よりよい選挙を実現するためには」では、子どもたちが投票率低下の背景を見いだしたうえで、「よりよい選挙を実現するためには、どのようなことが必要だろう」という問いをもとに議論しました。単に投票率を上げることがめざすのではなく、「民意をより反映しやすい制度を模索すること」や「日頃から政治に参加する意識を高めたり、自ら発信したりすることが大切であること」が語られました。これらの姿は、社会に対して自分にできることを考えたり、社会参画への思いを抱いたりする姿ととらえられるでしょう。

今年度の授業実践を通して、子どもたちが「追求したい」と思える魅力ある題材を開発することとともに、その題材においてどのような対話が行なわれることが題材の価値(おもしろさ)を味わうことにつながるのかについて、授業者が綿密に構想し、対話を深める手だてをうつつことが大切であることがわかりました。来年度も、子どもたちが様々な見方・考え方から社会的事象をとらえることを通して、教室に異なる価値観の語り合いを巻き起こし、「すべての人にとって最善の姿」を追求する「社会科ならではの文化」を味わえる授業を創っていきます。(尾崎弘剛・勝又悠太)



数 学 科

Mathematics

私たちは「様々な問題について、論理的かつ客観的に解決にあたる人」を育みたいと願い、「子どもたちが数学する授業」をめざし実践を重ねてきました。

「ドローンを使って被災地の3つの陸の孤島に救援物資を運ぶためには」では、災害時に活躍が期待されるドローンを話題にし、「三角形の3つの頂点からの距離の和が最も短くなる点はどこだろうか」という問いを共有しました。子どもたちは、自分たちなりのイメージをもって意見交換しながら、より論理的な説明へとしていくことで、作図でその地点を見つける方法を発見していききました。さらには、陸の孤島の数が増えたらどうかと疑問を抱き、追究した子どもの姿も見られました。

「等しく分ける方法-見えない角の二等分線-」では、2本の直線の交点が隠された状態で角の二等分線を作図する課題を、既習の学習を根拠にして「自分の考えた方法は本当に正しいのか」「他の考えを聞いてみよう」と議論し、図形の移動によって視覚的に理解する子どもや、性質を組み合わせで説明しようとする子どもの姿が見られ、図形における性質を自分たちなりにとらえ直していききました。

今年度の授業実践を通して、法則や数理を導き出した先人たちの知恵にふれたり、問いに対して自分なりの根拠をもって互いに表現したりして、身近な事象を問い直すような体験を繰り返すことで、子どもたちが数学する授業につながっていくと実感できました。今後も子どもたちが数学する授業の具体的な姿を追究し、実践していきたいと思っています。(杉山元希・松本匡由・森正樹)



音 楽 科

Music

音や音楽には、人々の心を動かし、豊かにしていく力があります。「音風景を起点とした創作」一身のまわりの音が醸し出す気配や雰囲気表現する音楽をつくろう！(第1学年)では、子どもたちの「無意識のうちに聞き流していた周囲の様々な音にじっくりと耳をすます姿」「知覚・感受した“自然の音”や“人工的な音”を楽器や声で素直に表現する姿」「感じ取った気配や雰囲気近くに近づけていこうと、“音色”“強弱”“音の重なり”などといった視点をもって、表現を吟味していく姿」が見られました。題材の中で、音や音楽そのものに心が動かされる経験を積み重ねていった子どもたちは、様々な音色の価値に気づいたり、間や余韻などを含めた音の可能性を感じ取ったりすることができたようでした。

しかし、生み出していく音や音楽にさらなる思いや意図をのせていくための対話を子どもたちから引き出す授業者の手だてについては、課題が残ります。子どもたちの豊かな発想を認めつつ、それを「どこまで受け入れ、どこから考え直させるか」について見極めていくことが、音や音楽に対する感性を豊かに働かせながら音楽表現を深めていく子どもたちの姿を引き出すことにつながるでしょう。今後は、題材の目標にせまるまでの子どもたちの思考やつまづきを授業者がより明確にイメージし、音楽を形づくっていく要素についての視点をさらに見極めて授業を構想していきます。(小林真人)



理 科

Science

今年度は理科ならではの文化を存分に味わうために、子どもたちの視野を広げたり考えをより深めたりするような、仲間との対話が生まれる手だてについて研修してきました。研究協議会では、2つの台車が互いに及ぼし合う運動に疑問を持った子どもたちが、台車に働く力や作用・反作用の関係、運動エネルギーについて追究の結果を基に議論し合う姿や、胃腸薬に含まれる消化酵素の特性について、デンプンとタンパク質の両方向から追究する姿を見ていただきました。どちらの授業においても一つの自然現象について複数の視点で追究していくことで、子どもたちが多様な考えをもち、クラス全体での対話を生み出すきっかけとなりました。対話の中で子どもたちは根拠を大切に意見構築し、自然現象に対する理解や考えを深めたようでした。

事後の協議会では「複数の視点から追究している姿」「科学的な対話をしている姿」など子どもたちの姿を基にしたご意見をいただき、対話することの重要性を改めて実感いたしました。

今後は、科学的な対話をより引き出すためにはどのような手だてが有効であるのかについて研修を進めて参りたいと思います。(海野雅爾・井出祐介)



美 術 科

Arts

美術科では「感性豊かに、創造していく人」を育みたいと願い、子どもたち一人ひとりの個性が発揮され、かかわり合うことで個性が深化したり、発展したりしていくような授業をめざして実践を重ねてきました。

研究授業「問題点を発見することから生み出すプロダクトデザイン」では、定規など様々なプロダクトデザインの鑑賞を行った後、学校の机と椅子のデザインについて考えました。机と椅子を使う場面での一連の動作を細かく列挙していくことで問題点(ブチストレス)を発見し、問題点を解決するための新たなデザインをグループで考え、提案しました。運ぶ時に机にのせやすいように肘掛けを付けた椅子や、ガタガタする不安定さを解消するため3本脚にした机など、様々な具体的なデザイン案が出されました。子どもたちの取り組みから、一連の動作を細かく列挙するというプロセスを踏むことは、新たな製品を具体的に考えていくために有効な手だてであったという手応えを得ることができました。また、どのような学習形態で取り組むことが子どもたちの思考を深めていくのか、その時間の目的や場面に応じて適切なあり方を考えていく必要があることが課題として挙げられました。

今後は、表現や鑑賞していく過程を大切にしながら、さらなる学びの充実につなげられるように、授業構想・実践を重ねていきます。(土肥正通)

